

一五世紀終わりには、ヴァスコ・ダ・ガマ [ポルトガルの探検家。ポルトガル領インドの総督となる] がやってきて、植民地主義をもちこんだ。一六世紀には、ポルトガル人、オランダ人、フランス人、イギリス人が、インドとの交易権をめぐる争いをくりかえし、結局、一八世紀後半になって、イギリス東インド会社が支配的地位を占めることになった。「セポイの反乱」[一八五七年から五九年にかけて、東インド会社のインド人傭兵（セポイ）がイギリスの支配に対して起こした反乱] の鎮圧の結果、一八五八年、インドは大英帝国の一部となった。

インドには「個人専属秘書」パーソナル・セクレタリー（PS）という職種があり、アポイントメントとスケジュールをあつかっている。また、「副秘書」や「共有秘書」という職種もある。さらに

その下には「バーブー」（「個人専属助手」）パーソナル・アシスタントという人たちもいる。これはたいていが男性の事務職員で、手紙をタイプしたり、書類の整理をしたりする。はしごの一番下には清掃員と「チャプラーシ」（使い走りやお茶くみ）がいる。チャプラーシは、ファイルの出し入れ、茶菓の用意、小切手の現金化と振り出し、電話料金の支払い、航空券の受け取りなどなどの雑用をおこなう。彼らの多くが農村部の貧しい上位カーストの出身で、多少は読み書きができる。

インドのシステムは階級制なので、「委員会」スタイルはまったく機能しない。インド人は「率直な」スタイルを好まないし、穏やかならぬコメントや批判で会議の雰囲気をかき乱す若いうぬぼれ屋も信用しない。

多くの取引や交渉は舞台裏でおこなわれる。たとえば、国民会議派の党首が、意見の対立する問題について話し合うために、おもだった「労働委員会」のメンバーたちとひそかに個別の会合をもったうえで、改めて舞台裏でなされた合意を明らかにする会議をもつ、ということもめずらしくない。ビジネスの世界では、ほとんどの企業が非公開の同族経営なので、このような傾向はさらに強くなる。

インドが乗り越えなければならない最大のハードルは、依然として未整備のインフラストラクチャーである。とりわけ**電力、道路、通信、港湾、空港は大きなボトルネック**になっている。政府は公営企業の独占状態に手を着けたがらなかったため、これまでの動きはにぶかった。しかし、もはや、再編にとりかかり、こうした分野を民間企業に開放する以外にできることはほとんどなくなった。

政府の職員は、時間を厳守する必要があるとは思っていないし、時間を守らないことに対する罰則もない。しかし、**ボンベイの労働者**はいまも時間と規律の厳守を示すモデルとなっている。モンスーンの季節には、豪雨による洪水で道路や地下鉄の線路が冠水して、何百人もの女性がゴム長を履き、着替えを両腕の下に抱えこんで歩いているのが見られる。彼女たちはオフィスに到着すると手早く服と靴を替え、すっかり身なりを整えて、いつものようにてきぱきと働きはじめるのである。

イギリスの支配から独立して以後は、官吏を「旦那様サーヒブ」とみなす悪習を絶つために、公務員の給料が相対的に価値を減ずることが容認されることになった。同時に、無一文の政治エリートが政府の支配権を握り、平等な社会を建設するためという名目のもとに、経済の事実上あらゆる要素を支配するシステムをつくりはじめたのである。

この新しいシステムは、**強欲な人間に好都合**だった。現代にいたっても、企業を設立したり、拡張したりするには、なんらかの認可、免許、証明書を政府に交付してもらわねばならないのである。手早く許可をあたえる見返りに分け前を受け取ることで満足する人間もいれば、親族を通じて事業に参加することを要求する人もいる。

・・・

そうしたひとびとは、なにかの免許、割当

て、提案などにかかわる書類の処理を遅らせたり早めたり、妨害したり促進したりすることが金脈になるということを見つけた。たとえば、電気通信労働者は、**賄賂が届けられるまで平気で回線を止めたりする**のである。

交通警察は、過積載のトラックを検挙しないことで、システムティックに賄賂を受け

取っているといわれている。警察は、「報酬コンシダレーション」を目当てに殺人者を放免していると非難されてきたし、司法当局、とりわけ下級職員たちも、同様のことを教唆したとして告発されたことがある。だが、この数十年間、複数の首相とその親族をふくむ多くのひとびとが告発はされたものの、大物政治家、ビジネスマン、高級官僚が、**贈収賄で有罪を宣告された例はほとんどない**。

呼びかけ方

伝統的なあいさつ「ナマステー」と同じように、「ジー」という敬称は、相手の年齢や性別にかかわらず、だれに対しても、ほとんどどんな場面でも使える。たとえば、「マイケル-ジー」「ジェーン-ジー」「ジョーンズ-ジー」というように、ファミリーネーム、ファーストネームにかかわらず、名前のあとにつければ、万事が片づくのである。

タブー

バラモン文化の「浄」と「不浄」の概念から、さまざまな文化的タブーが生まれる。

その多くは食べ物に関連したもので、以下に代表的なものをあげる。

- ・左手は、食事や、他人に食べ物や品物をわたすときにはぜったいに使わない。左手は排泄の際に使うものだからである（インド人はトイレトペーパーをまったく使わず、水を使う）。
- ・なかにはナイフやフォークやスプーンを使うインド人もいるが、多くの人が伝統的なスタイル、つまり指を使って食べるほうを好む（インド文化は、フォークやスプーンの発明より数千年も古い）。
- ・他人の所有する食器（あるいは、他人がすでに使用した食器）で飲食することに対する強いタブーがある。自分がすでにかじったリンゴをひとかじりするようにと他人に差し出すことも絶対にしない。
- ・多くのインド人は厳格な菜食主義者であり、また絶村的な禁酒主義者である。厳格なイスラム教もまた飲酒を禁じている。シク教徒とパールシー教徒は、喫煙を禁ずる教えを守っている。

- ・女性のひたいにつける印「ビンディー」は、しばしばいわれるようなカーストをあらわす目印ではなく、たんなる装飾にすぎない。

~~~~~

ビンディー（ヒンディー語: बिंदी）は、額に施す装飾。原則として既婚で、なおかつ夫が存命中のヒンドゥー教徒の女性がつけるものである。ビンディーはヒンディー語であり、その語源はサンスクリットで「点」を意味する「ビンドゥ（बिंदु, bindu）」である。

ビンディには、いろいろなデザインがあり、シールになっていてシートで売っています。

~~~~~

- ・花嫁候補はどれだけの財産——宝石、現金、家具、車、不動産などなど——を持参できるのか？

（花嫁の持参金は一九五〇年代なかばに法律で禁止された。じっさい、理屈のうえからは、嫁資をもって結婚するというのは、花嫁を売るのも同然のこととみなされ、禁固刑に処せられる。それなのに、多くの家がいまでも現金か品物でとほうもない嫁資を払っている。娘にたっぷり嫁資をあたえて結婚させるために、生涯にわたってケチケチ節約して暮らしているビジネスマンも見受けられるほどだ）

~~~~~

嫁資（かし） 嫁入りの際に持っていく財産。嫁入り支度

~~~~~

伝統衣裳

古い世代のなかには、いまでも「クルター」（裾がひざまで届く長いシャツ）と、「ドーティー」という六ヤード丈の一枚布の腰布を身に着けるのを好む人たちもいる。北部では、ドーティーはひだをつけて折り、優雅に足のあいだにたくしこむ。南部（ドーティーではなく「ムンドゥー」と呼ぶこともある）ではロングスカートのようにまとう。そして、頭にはあっさりした帽子かターバンを着ける。

威勢のよいターバンも、いまではシク教徒がかぶるだけになってしまった。シク教の習慣として、長く伸ばした髪を巻き、ターバンの下に収めることになっているのである。